

動物園の動物展示を続けていくために

園長 小松 守

動物園という場は、野生動物(動物園動物ということが多い)を飼育し、来園者に見ていただくこと(展示)で役割を果たしている場です。でも、動物にだって人間と同じように寿命があるし、病気もするし、永遠のいのちではありません。当たり前ですが、死んでいなくなればその動物の展示ができません。だから動物のいのちをつなぎ続けることを動物園では大事な仕事の一つにしているのです。大げさに言うならば種保存ともいいますが、基本は展示を続け、動物園が社会的な役割を果たすためのものです。動物園のことなどを本にしている作家の川端裕人さんは、ずっと以前の動物園の会議で種保存を動物園であるための当たり前の仕事、「所作」とも表現したことを思い出します。

当園も全国、時に世界の動物園の協力を得て、アムールトラやユキヒョウなど様々な動物の導入や繁殖を実現でき、動物園の展示を続けることができています。今年にはアフリカゾウを飼育する東北三園が協力し、繁殖を

めざすためメス同士の交換を予定していますし、大学の力を借りてチンパンジー・ボンタの精子保存の取り組みを進めたりもしています。

様々ないのちをつなぐ努力は、各地の動物園で行われ知見や経験値になっています。そうした取り組みや知見、経験値の集積は、やがて野生にすむ動物たちが危機に陥ったとき、本来の意味の種保存にも生かされるに違いありません。展示を続ける努力は動物園の基礎であり、未来の動物園のためにも欠かせません。



ユキヒョウ



チンパンジー

特集1

アフリカゾウの繁殖に向けて

園長補佐 三浦 匡哉

アフリカゾウのだいすけと花子が市制100周年事業で秋田に来てから今年で28年です(写真1)。2頭の仲は良く、これまで交尾が何度も確認されていますが、数年前から花子の排卵が止まってしまう繁殖が難しくなっています。一方、国内の動物園でもアフリカゾウは近年繁殖が見られず、飼育展示の将来は危機的な状況にあります。

このような中、距離的にも近い東北三市の動物園がそれぞれ繁殖適齢の雌雄を飼育していることから、ペアの環境を変えることなどを通じ、繁殖へ結びつける取組を昨年度から検討してきました。

ゾウを移動して繁殖に取り組む事例は全国的にも見られますが、今回のように地域の三つの動物園が相互に連携し、ゾウの交換により繁殖に取り組むことは国内で初めての試みです。

昨年6月下旬、仙台市八木山動物公園と盛岡市動物公園、秋田市大森山動物園の各園長と飼育員、公益社団法人日本動物園水族館協会のアフリカゾウ計画管理者(当時)が一堂に会しました。

まず、国内のアフリカゾウの現状について計画管理者から説明があり、各園のゾウ担当がそれぞれのゾウの現状について報告した後、検討会を行いました。仙台のペンとリリー、盛岡のたろう、秋田のだいすけと花子は、いずれも1990年代始めに来園し、年齢もほぼ同じで、花子だけでなく、リリーも排卵が止まっています。



これは幼い頃からペアで過ごしてきたことも理由のひとつと考えられるため、繁殖相手を含め環境を変えることで、この状況を打開したいと考えました。

また、ゾウも人と同じで、年を取ってからでは妊娠しづらくなったり、難産になる可能性が高くなります。タイムリミットが近づいているのです。第1回目の打合せでは、必ずしも繁殖につながる保証はないものの、現状を打破するために、三園でペアの組替えを一定期間行うことで、繁殖の可能性を探っていこうということでもまりました。

その後、担当レベルで2回の検討会を行い、三園でゾウの情報を共有し、繁殖に取り組む具体的な方法を検討していきました(写真2)。

今年の5月末には、仙台と秋田の間でメスを移動させることが決まり、6月11日に開催した合同発表会で三市が協力し相互に繁殖に取り組む覚書を取り交わしたことを公表しました(写真3)。

8月19日には、高木美保名誉園長や来園者も参加し「花子を送る会」を開催しました(写真4)。花子の移動は9月下旬を予定しています。この冊子を皆さんがご覧になるときは、無事にゾウの移動が終わり、花子が仙台で元気に暮らしていることを期待しています。移動の詳細い内容や仙台での花子の生活などについては、次号のコミュニケーションで報告したいと思います。



写真1 だいすけ(右)と花子



写真2 大森山動物園でのゾウ移動会議(5月23日)



写真3 三園による合同発表会(6月11日)



写真4 花子を送る会(8月19日)

花子を送り出す心境

飼育展示担当 山上 昇

6月20日、アフリカゾウの花子を移動するための輸送箱が動物園に到着し、同月22日から花子を輸送箱に入れるための「箱取り馴致訓練」(以下、訓練)が始まりました。当園では初めての経験です。

訓練では、花子を怖がらせないこと、ゾウ担当は慌てないことが重要で、お互いの信頼関係が何より大切です。花子は好奇心旺盛で、何事にもチャレンジする積極的な性格ですが、私たちは狭い鉄の箱に入ってくれるか心配な毎日でした。

そんな心配をよそに、花子は物おじせず果敢にチャレンジし、訓練開始4日目には箱の中に入りました。驚きとうれしさが入り交じり、とても不思議な感覚でした。

しかし、順調だった訓練も途中で花子が警戒し始めたり、担当が音を立てて驚かせ

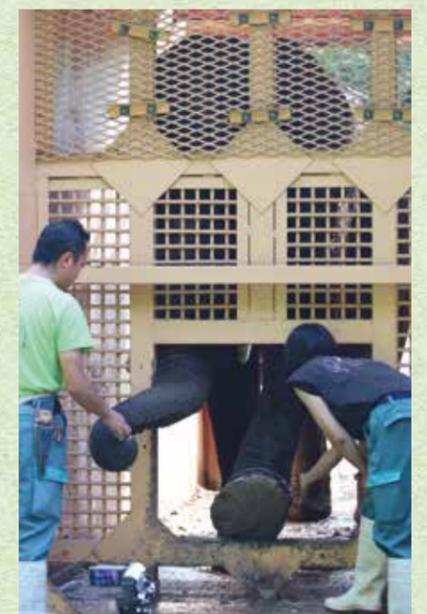
てしまったり、予想していなかった出来事がありました。試行錯誤を重ねて9月中には無事に仙台へ花子を届けたいです。

長年、花子を見守り続けた担当者として、とにかく花子には「赤ちゃんを産んでほしい」「母になってほしい」の一心です。

花子は体も丈夫で人なつっこいゾウなので、きっと仙台に行っても新しいパートナーと上手くやってくれると思います。



ゾウの輸送箱



箱取り馴致訓練